
【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

〈批判／臨床〉の平面論——『意味の論理学』と一義性の思考について⁽¹⁾

江川 隆男

はじめに——問題提起

本日は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（一九六九年）出版五〇周年記念に講演者としてお招きいただき、誠にありがとうございます。今回の私の論題の基底には、この『意味の論理学』に対するいくつかの批判的観点が含まれています。というのも、このことを介してこの著作の哲学上の位置づけを改めて提起したいと考えているからです。ここでは、いくつかの問題提起を通してこの著作そのものの〈存在根拠〉に迫っていければと思っています。ここで言う〈存在根拠〉とは、とくに哲学においてしか肯定的に思考されえず、また表現されえないような、むしろ脱根拠的な諸問題を構成する諸要素のことです。しかし、こうした事柄を従来の様式ではなく、どのような新たなスタイルで論じたり書いたりすればよいのでしょうか⁽²⁾——つまり、理由づけ、要約、追認、アナロジー、解答、注解、真理への意志、等々とは別の仕方です。哲学におけるスタイルとは、或る観念の対象に対する切り込み方そのもののことであり、その限りでそこにおいて問題の提起と構成と実現とが存立することだと言えます。

さて、『意味の論理学』の最大の特徴の一つは、たしかに「特権的なセリーはなく、セリーは収束せず、それらのあいだに意味が浮かび上がる」ことにあると言えます⁽³⁾。しかしながら、その最大の意義は、超越論的領域そのものの発生を身体の触発のもとで問題構成することで、事物一般の表面を実現することにあると言えます。これによって『意味の論理学』が、『差異と反復』（一九六八年）における超越論的経験論よりも超越論哲学の発生論として——とりわけ言語と人間精神にとって——は実質的に一歩進んでいるということはたしかでしょう。ところが、ドゥルーズは、そのためにいくつかの水準あるいは次元、諸層を行ったり来たりと、せわしなく経巡ります。それは、あたかも自分で「注釈者の偉大な弱点」を引き受けるかのようです。西洋哲学における超越論哲学は、いかなる形態のもとで思考されようと、やはり本質的には二ヒリズムを支持する言説の総体以外の何ものでもないでしょう。超越論哲学に対するこうした批判的遠近法を意識しつつ、一つの多様体として『意味の論理学』を考えていきましょう。この著作は、何よりも〈身体的なもの〉と〈非身体的なもの〉との

境界線を哲学史上はじめて明確に規定した初期ストア派の人々の考え方に依拠して展開されます。とりわけ次の言説は、本書の〈出来事の哲学〉——言わば超越論的出来事論——にとってもっとも基本的なものです。「すべての物体は、（それが別の物体に働きかけるとき）その別の物体に対して或る非物体的なものの原因となる」[強調、引用者]⁽⁴⁾。つまり、物体間の相互作用は、必然的に非物体的なものを相互に発生させ結果するということです。非物体的なものは、人間身体であれ他の物体であれ、それらの中の相互作用やそれによる混合が生じる限り、つねに生起しうるものなのです⁽⁵⁾。非物体的なものとしてのプラトンのようなアイデアも、実際にはこの産出に巻き込まれ、自然に内在することしかできないでしょう。ところが、こうした原因としての物体は、結果（あるいは効果）としての非物体的なものに出会うこと、つまり混合し合うことはありません。何故なら、両者はまったく次元を異にし、非物体的な諸結果はけっして物体のように他の物体に対する原因とはなりえないからです。それにもかかわらず、われわれは、自由にそれらの間を移行して、それらについて傍観者のように、言わば無差異な中立者のように論じることができます。それは、ドゥルーズが述べているように、あたかも注解者の最大の欠点であるかのようです。ところが、実はドゥルーズ自身が、そもそも『意味の論理学』をあえてこの立場から書き上げていると考えられるのです⁽⁶⁾。この限りでこの著作は、ドゥルーズ哲学における最大の弱みでもあると言えるでしょう。それゆえ反対に、これこそがこの書物の最大の魅力と意義でもあるように思われます——すなわち、この意味においてもっともドゥルーズらしい作品として。

『意味の論理学』における超越論哲学再考

われわれは、まず次のように問うことができるのではないのでしょうか——何故、本書が、〈意味の論理学〉ではなく、〈表現の論理学〉として書かれなかったのか、と。例えば、ドゥルーズが頻りに参照する、エミール・ブレイエの『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』においては、「一般的に言うところ、〈意味されるもの〉が一つの〈表現可能なもの〉であるとしても、われ

われには、あらゆる表現可能なものが一つの意味されるものであるかどうかまったくわからない」と述べられています⁽⁷⁾。『意味の論理学』における超越論的な発生論は、動的であれ静的であれ、その構成の側面において現実に運用されている言葉（あるいは事物の表面）の効用が過剰に目的論化されているように思われます。この著作のもっとも野心的な課題は、かなり古典的ではありますが、やはり超越論的領域そのものの発生を問うことにあるでしょう。そして、この領域の発生的要素がまさに身体が存在——第一次秩序と言われる深さの次元——にあることが明言されます。しかし、ここでの超越論的なものとはそもそも何であるのか。それは、きわめて限定されたもの、つまり第一に言語行為における諸作用を条件づけるもの、すなわち言葉の〈意味〉であり、第二にこうした諸々の〈意味〉からなる構造論的场所を配分する言わば絶対的位置としての〈無-意味〉である（第二次組織と称される高さの次元）。これらが、われわれの言語活動一般（指示、表明、意義）——第三次配置と呼ばれる表面の次元——を条件づける超越論的領域として定立されます。ところで、『意味の論理学』の前年に出版された『スピノザと表現の問題』（一九六八年）では、周知のように、表現の三つ組の論理——表現そのもの（属性）／表現するもの（実体）／表現されるもの（本質）——のもとに哲学の表現主義が探求され、またそこではこれを含めて表現の七つの三つ組が提起されています。あくまでも形式的な側面からだけですが、それらは、実際にはストア派以来の言語の三角回路（セーマイノン テュンカノン セーマイノメノン 意味するもの／指示されるもの／意味されるもの）が有する関係性の応用だと言うことができます⁽⁸⁾。このことは、スピノザには超越論的領域が存在しない以上、たとえ表現の論理における〈表現されるもの〉が表現の形相のうちには存在しないとしても言語の三角回路との決定的な違いはないと言わなければなりません。スピノザにおける表現の論理はつねに思考の極限において展開されているため、ドゥルーズのスピノザ論でさえ、そこからさらに遡行しうるような思考の余地はまったく存在しません。しかしながら、いかなる意味においても、言語モデルからの脱化の運動を獲得するなら、つまり実体が徐々に解体されて、神の二つの能力から展開される〈表現／内容〉の並行論、言い換えると、その非対称的総合の並行論が思考されることしかできないものとなるなら、表現の論理をめぐる非物体的なものの諸環境はまったく異なるものとなるでしょう。

『意味の論理学』における非物体的なものとしての〈意味〉は、言語活動の諸作用を経験的に条件づけるものとして、つまり超越論的条件として組織されます。そうだとすると、つまり〈意味〉がわれわれの言語活動における諸作用とまったく類似しないものとして定立されるとしても、この超越論的な組織体がつねにこ

れらの作用の媒介なしには理解されないということに変わりないでしょう。この限りで『意味の論理学』におけるこの超越論的経験論には実は〈複写術〉と〈媒介作用〉との後味が多分にあると言えるのではないのでしょうか。ところで、この著作と同じ年に、ミッシェル・フーコーの『知の考古学』が出版されています。前者は〈意味〉という超越論的位相、つまり言語活動における諸作用（指示作用、表明作用、意味作用）の条件を、また後者は〈言表〉の考古学的位相を、つまり言語における諸様態（語、文、命題、文法、等々）に先行する存在様態をそれぞれ明確に打ち出した画期的な著作であることに間違いありません。あるいはこうした基本的論点を改めて哲学史に位置づける仕方と言い換えるなら、例えば、前者はライブニッツ主義とその超克の哲学であり、後者はカント主義における言語以前の総合判断の諸機能と素材についての表現（言表）であるということもできます——すなわち、非共可能性の先鋭化と非汎通的規定性の根源性。いずれにしても、このように捉えていくなら、われわれは、カントのライブニッツ批判がいかなる点にあったのかをつねに意識し、またその再表現への努力を怠ってはならないでしょう。というのも、『意味の論理学』は、依然として超越論哲学を形成する諸問題とその意志のうちに存立していると考えられるからです。カントの批判は、端的に言えば、ライブニッツにおける認識の対象が物自体にとどまっているという点にあります。では、物自体とはいったい何のことでしょうか。現象の背後に想定される単なる基体のようなものでしょうか。物自体をより概念的に規定するなら、それは、〈存在するものはすべて汎通的に規定されている〉という考え方に依拠した対象性のことです⁽⁹⁾。これは、言わばカント以前あるいは以外の諸々の形而上学的思想が容易に感染しうるような物の実在的存在の基本原理の一つであると言えます。これは個体とは完全な規定性を有するものであるという考え方の基本であり、ライブニッツにおける対象性はまさに個体のこうした意味での完全性概念に帰着することになります。この点を超越論哲学の観点から言い換えると、対象が汎通的に規定されているなら、それについての判断あるいは認識はすべて分析的でしかないということになります。これに対して、われわれの認識あるいは経験は、つねにこうした物自体性として表象されうるような完結可能性を否定する特質を潜在的に含んでいなければ、けっして成立することはないでしょう⁽¹⁰⁾。カントにおいては、現象は、非汎通的規定性という根本特質のもとでのみ存立し、その限りにおいて非純粋でア・ポステリオリな総合判断の対象性となりうるのです。非汎通的規定性は、言わばこうした総合判断の積極的な存在根拠であり、その限りで現象の存在の認識根拠にほかならないでしょう。しかしながら、非汎通的規定性は、カントにおいては、最終

的には、つまり理念の水準ではまったく無化されてしまうこととなります⁽¹¹⁾。要するに、この非汎通的規定性は、カントにおいては、諸能力の発散的行使にまで至らず、また多様体としての理念そのものの特性にまで届かなかったということです（この問題に応答したのが、ドゥルーズの強度の感性論と理念の弁証論です）。

これと連関して、〈潜在性-十分な規定〉と〈現働性-完璧な規定〉との間の言わば様態の区別は、相互にどこまでも共可能的なままである。そうすると、意味の論理のもとで限定された超越論的領域は、必然的に根拠づけのあるいは目的論化された言語使用しか与えないものとなるでしょう。そうではなく、非共可能的な諸様態の間の齟齬や距離を肯定するもの、その条件が永遠回帰と言われるものの言表作用こそが問題となるのです。超越論的経験論——諸能力の発散と超越論的領域の非複写性からなる——は、たしかに諸能力の発散的行使を実現し、同一性に先立つ差異についての哲学的思考を可能にしましたが、意味の論理における齟齬や発散は依然としてきわめて限定的なままです。反-実現（脱-現働化あるいは非-表象化）は、超越論的領域あるいは第二次組織を困い込むだけでなく、その組織そのものを発散させようような身体の触発から投射される表現形相でなければならないでしょう。或る語を形相とした身体の触発（叫び、氣息、等々）は、たしかに静的発生のもとでは事物の状態の一つになりますが、しかし他の隣接する諸帰結とはまったく異なるものとしての作用（実現）原因になりうるものでなければなりません⁽¹²⁾。現代の反時代的問題は、『意味の論理学』を形成する三つの次元の区別でも二つの発生の種別分けでもなく、むしろそれらの間を非共可能的にする諸要素が何であるのかを規定し、それを実践や戦略の言語にまでもたらすことにあるのではないのでしょうか。要するに、超越論と経験論との間そのものに共立不可能性という様相の介入をいかにして認めるのかあるいはどのように実現するのか、とわれわれは問わなければならないでしょう。それは、意味の論理に普遍性をもたらすために必要不可欠な問の仕方であると思われる。

ここまで述べてきたなかで、ドゥルーズにおける（とくに『差異と反復』と『意味の論理学』を中心とした）超越論哲学の意義を改めて哲学史のなかで言うとするれば、それは、カントにおける非汎通的規定性とライプニッツにおける共立不可能性との総合にあると言えるでしょう。それは、言い換えると、カントの構成説の根源にあるものとライプニッツの様式主義の先端にあるものとの非対称的総合です——あるいは理論の根源と実践の先端との結合、さらに言えば、非汎通的規定性のさらなる批判的な理論構成、非共可能的な出来事のプラクシス、あるいは発散する系

列のポイエーシス。ドゥルーズは、たしかに潜在的な〈判明で-曖昧な〉位相と現働的な〈明晰で-混雑した〉状態との間の或る種の逆説的關係を明確にしたが、しかしライプニッツにおいては現働的な諸様態が有する「不一致対象物」（例えば、右手と左手）を非対称的に総合する感性は存在しない（強度の問題）⁽¹³⁾。したがって、個体から個人へ、そして命題へと静的発生の過程を進捗させるなかでこうした非対称性は、たしかに命題の意味においては理解されるが、しかしながらけっして直観的には知覚されないこととなります。これを知覚可能にするのがまさに〈副-言〉の使命だと言えます。ドゥルーズにおける超越論的経験論は、何よりも強度の超越論的感性論として存立しなければなりません。この感性論は、まさに感覚されるものの非対称的総合を扱うこととなります。また、『意味の論理学』におけるライプニッツの超克、つまり非共可能性という様相を有する他のあらゆる様相（可能性、不可能性、現実性）の総合態——離接的総合——の肯定は、意味や無意味そのものを発散に追いやり、それらの形相一般を別の水準に送り返すことができます。この先端は、次のような根源に結合されるのです。カント哲学には言語論がまったくありませんが、それにもかかわらず、三批判書の本質には判断力があり、したがって判断の諸形式があります。こうした非言語的な判断が可能になるのは、超越論的観念論に限って言えば、現象という対象性が本質的に非汎通的規定性のもとに存立するからです。『純粋理性批判』におけるこの非言語性の構成を積極的に言い直すと、それは〈言表の認識論〉だと言えるでしょう。現象の多様体とは何か。それは、まさに言表の集積体だと言い換えることができます。つまり、この集積体とは、逆に言えば、物自体なき現象の多様体のことです。言表は、語、文、命題、文法、発話行為でもなければ、それ以上に意味、無意味をもたず、それらをむしろ自らの派生物とするような非カテゴリー的な機能であり、言語の外の機能素なのです。要するに、離接的総合の哲学は、カントにおける非汎通的規定性を非共可能性という様相のもとで再総合する力能を有するのである。それと同時に、ライプニッツに端を発した〈副-言〉は、カントにおける命題以前のあるいは言語を前提としない判断の力能に関わるまさに〈言表〉の位相との間での本質的な対応性を有するであろう。

表面のプラグマティック——浅さと低さを総合するもの／一義性の最小回路について

ところで、前ソクラテス期の思想はまさに深さの哲学であり、それは物の自然についての思想でした。これに対してプラトンは、高さの哲学者であり、自然を象徴する仄暗い洞窟から出で、〈太陽-イデア〉を希求するような、自然を超えた思考を開始しまし

た。言い換えると、前者の自然哲学には〈深さ-浅さ〉の差異の度合を有する運動の観念があり、また後者の形而上学（超自然学）には〈高さ-低さ〉の質的差異をめぐる道德の視座があります。さて、これらの考え方に対して古代ギリシア哲学においてもっとも偉大な初期ストア派の人々は、いかなる操作を施したのでしょうか。彼らは、こうした深さでも高さでもない、それらとはまったく異なる表面の知性を開示しました。言い換えると、初期ストア派の哲学者たちは、とりわけここで述べた〈浅さ〉と〈低さ〉を物と思考の同一の表面として、上昇と下降という二つの観念的運動とともに総合したわけです。浮上過程の〈浅さ〉はまさに事物の實在的屬性となり、また落下過程の〈低さ〉は命題の意味となつていきます。つまり、表面の一方にはつねにより浅い、つまり深さからの上向経路があり、他方にはより低い、つまり高さからの下向作用があるわけです。二つの観念的、しかし力動的な運動を総合する〈表面-速度〉の哲学においては、こうした事物の属性と命題の意味との同一性を問題提起することが最大の課題であつたと言えます。これは、後で述べるように、たしかに『差異と反復』では明確に論究されなかつた一義性の遠近法に帰属します。しかしながら、この本質的論点と同時に、『差異と反復』における強度空間に匹敵するような〈深さ／高さ／表面〉——その非対称的総合の意義——について思考することがなければ、もっぱら〈秩序／組織／配置〉という結果の構図に囚われた超越論哲学を、つまりその有機的な作品形成を跡づけ、また展開するだけになってしまうのではないのでしょうか⁽¹⁴⁾。ここで言う〈有機的〉とは、〈秩序／組織／配置〉という諸水準の間の共可能的な〈堆積化〉という意味です。それらは、この〈可能的-現実的〉な目的論のもとに、あるいは超越論的図式主義のもとに依然として存していると言えます。これに反して、深さから浅さへの上昇過程と高さから低さへの下降過程とを必然的に含むような非対称性の表面の形成は、これと同じ必然性を以って表面から平面への脱-超越論化の諸観念を形成することになるでしょう。

ところで、プレイエは、すでにこうした一つの表面の二重性の論点を形式的には把握していました——「この両者〔事物の實在的屬性と命題の論理的述語〕は、〈カテゴリー〉という語によって指示され、またこの両者の表現を諸々の動詞のなかに見出す、これらはともに非物体的で非實在的である。實在の側面から言えば、活動を生み出す恒常的な存在者の實在性を増すために、〔逆に〕その活動の實在性はいわば軽減されたのである。また論理学の側面から言えば、属性は、思考上の概念的対象というその尊厳を奪われ、もはや一時的で偶然的な事実しか含まなくなる。したがって、そうした属性の非實在性において、そしてこの非實在性によって、論理的 アトリビュ 属辞 と物の アトリビュ 属性 は一致することができ

るのである」〔強調、引用者〕⁽¹⁵⁾。この言説は、ここでのわれわれの問題意識においては、次のように言い換えられるべきでしょう。第一に事物の實在性は、その深さにおいてはより増大するが、その活動＝行為というより浅さが増大する動詞的表現の方位においてはより減少するということ——深さにおける〈浅さ-非實在性〉。すなわち、動詞的表現とは、事物の深さから浅さへの實在性の減少を本質的に含むことなしには存立しえない形相だということです。言語における表面のプラグマティックは、言い換えると、高さ⁽¹⁶⁾と深さを嫌うということです。それは、深さを浅さへと、それと同時に高さを低さへと凝縮する作用を本質的に有するものなのです。第二の論理学の観点から言えば、初期ストア派の考え方を前提とするプレイエにとっては、事物の属性は概念の対象ではなく、偶然的事実としての出来事しか含まないということになります。しかし、出来事の超越論哲学の観点から言えば、高さから低さへの下降作用は、非物体的条件による条件づけられるものの静的発生の論理を本質的に有しています。高さから低さへの意味の論理の速度は、深さから浅さへのそれとは非対称的な運動を出来事化として共有していると言えます。つまり、それは、属性の非實在性を出来事化するわけです。非物体的なものの表面は、こうした意味での〈より浅い〉と〈より低い〉という生成の度合の位相差をつねに一つに総合するような存在の限界面なのです。

出来事の哲学を考えるなら、ここでは、ニヒリズムや弁証法における基本特性の一つである否定性の優位（同一性中心主義、矛盾の論理、等々）は発散し、それに代わって存在の一義性の思考（差異の肯定、副-言の非論理）が形成されなければならないでしょう（副-言の機能とは、ライブニッツ主義を前提として言えば、感性の形式なしに反対のものを非対称的なものとして理解し、それを言語表現にまでもたらすことにあります）。つまり、この思考における観念は、諸様態において非共可能化された無数の出来事からなる、あるいはそれらの差異の積極的距離からなる一義的〈非-存在〉を形成するのです⁽¹⁶⁾。差異の工手力は、『意味の論理学』のこうした〈出来事の哲学〉においてはまさに〈存在の仕方〉主義として展開されます——存在の様式あるいは実存の様態、すなわち様式主義あるいは様態主義。至るところで、アリストテレスの帰属主義に対してライブニッツの様式主義が提起され肯定されることとなります。初期ストア派の四つのカテゴリー（基体、性質、様態、関係）は、こうした思考を獲得するために必要な武器となりうるものです。つまり、これらのカテゴリーは、認識のための道具箱ではなく、まさに思考の武器庫となりうるものなのです。これらは、その限りにおいて非カテゴリー的思考に現前する機能素だと言えます（ガタリの『分裂分析的地図作成法』

における四つの存在論的機能素も同様に考えられるべきでしょう)。

出来事の哲学は、哲学史の流れを踏まえて言えば、実体主義でも関係主義でもなく、まさに〈存在の仕方〉主義である、とすでに申しました。それは、端的に言えば、〈存在〉について一義的に思考する様式そのもののことです。つまり、それは、〈存在〉を実体化することも最高類と考えることもなく、どこまでも存在の仕方としての差異を肯定する思考のことです。誤解を畏れずに、これについてわかり易い説明をしたいと思います——神は〈存在する〉、人間は〈存在する〉、蟻は〈存在する〉……、とひとは言うことができます。存在の多義性においては、こうした〈存在する〉の声は、実はその主語に影響されて異なって聞かれる、つまり同名(あるいは同音)異義として理解されます。というのも、神の存在は、例えば、完全に無限であるが、人間の存在は不完全で有限であり、蟻の存在はそれ以上に不完全で有限であり、等々。このように理解された〈存在者の存在〉は、存在者の優劣的価値評価の先行性のもとに、つまり価値の位階序列がもつ否定性のもとにとどまり続けるでしょう。では、これに対して存在者の間の差異を肯定的に理解するには、どうしたらよいでしょうか。こうした存在者のうちには、人間や無機物、植物や動物とともに神も含まれます。そこで哲学の思考は、一義性という観念を見出しました。それは、先ほどの〈存在すること〉を主語に依拠することなく、すなわち先行する存在者の優劣の価値序列に囚われることなく、つまりこれに抗して同名(同音)同義として聞き取り、理解することにあります。そうすると、思考のうちで何が変化し、また何が生起し始めるのでしょうか。人間、蟻、神、等々は、それぞれの存在の仕方のもとでしか存在していないことが理解されます。換言すれば、それぞれの存在者は、自らの差異の肯定のもとで存在するのです。存在の一義性においては、神とそれ以外の存在者との間に否定性が入り込む余地などまったくありません。

〈存在すること〉とは、こうした意味での存在者の観念についての、つまり存在の仕方あるいは差異の肯定について概念——存在者の存在、肯定の肯定——にほかならないのです。要するに、存在は、あらゆる差異について唯一同一の意味で言われるということになります。

『意味の論理学』の「第二五系列」は、存在の一義性についての考察に充てられています。ここでは、『差異と反復』における言わば超越論哲学の到達点としての〈永遠回帰〉の系譜学的原理が改めて出来事の哲学の一義的平面として再構成されていきます。では、何故、一義性の思考が出来事の哲学に必要となるのでしょうか。ここで提起されている一義性の諸規定を改めて見ていきましょう。(1)「存在の一義性が意味するのは、存在は〈声〉である

こと、存在は言われ、また存在が言われるものすべてのものについて唯一同一の「意味」で言われるということである。存在が言われるものは、まったく同じものではない。しかし存在は、存在が言われるすべてのものに対して同じものである」。(2)「一義性が意味するのは、〈到来するもの〉と〈言われるもの〉とが同じ事物だということである。すなわち、あらゆる身体のあるいは事物の状態の〈帰属可能なもの〉と、またあらゆる命題の〈表現可能なもの〉」。(3)「一義性は、ノエマ的な〈属性〉と言語的な〈表現されるもの〉との同一性を意味する。すなわち出来事と意味」⁽¹⁷⁾。(1)は、すでに『差異と反復』で言われていた〈存在の一義性〉についての言わば名目的定義の一つです。存在は、〈声〉である。つまり、存在は、つねに存在する(在る)と言われるもの——例えば、無限なものであれ有限なものであれ(スコトゥス)、実体であれ様態であれ(スピノザ)、反復であれ差異であれ(ニーチェ)——について唯一同一のものである。この場合の声は、動詞の不定法の声であり、不定法の形相に息を吹き込む声である。そうした声は、〈存在すること〉、〈表現すること〉、〈回帰すること〉といったように純粋な出来事としての内在性を徐々に獲得していきます。これは、無限に多くのノイズと言葉についての、言い換えると、無数の上昇と下降についての唯一同一の声だということですから。一義的〈存在〉は、ここでは〈声-非意味〉として存立します。このようにして、差異の存在あるいは存在の仕方を肯定するには、〈存在〉は必然的に存在が言われるものについて一義的でなければなりません。

これに加えて、(2)あるいは(3)は、まさに『意味の論理学』において提起された存在の一義性としての永遠回帰についての新たな意義であり、またその表現であります。これは、出来事の哲学の先端における存在の差異、つまり到来することと、存在の反復、つまり存在が言われることとの一義性を述べたものです。『差異と反復』における〈無差異の中立性/差異の表現/差異の実現〉という存在の一義性の三つの水準は、実は出来事の表面そのものを形成し、またそこにおいて絶えず変様しつつ反復されています。これは、言い換えると、永遠回帰における一義性の最小回路、つまりその無際限な感染経路のことである。〈到来するもの〉と〈言われるもの〉、つまり表面における出来事と意味とは、差異の肯定的な一義性のもとで無限に多くの最小回路を形成するものである。さらに言うと、このようにして永遠回帰において〈到来するもの〉と〈言われるもの〉は、相互に反転して実質的に一つの同じもの、あるいは決定不可能なものを形成しています。存在の一義性は、表面においては二重の多様な運動を折り畳むような、理念的な速度をもった最小回路として存立するわけです。しかしながら、たとえ超越論的領域が新たに定立されたとしても、表面

上の一方は単なる事物の状態というまさに〈帰属可能なもの-出来事〉であり、また他方は相変わらず命題の〈表現されるもの-意味〉であるといった事態にとどまっていることはたしかであろう。要するに、『意味の論理学』では言語活動あるいは言説的形成に関わる諸要素——主体、言葉、物、対象、文、命題、意味、無意味、等々——に先立つ存在の様態が、あるいはそれらを派生したものとす言表の機能が完全に見逃されています（後のガタリとの著作においては、「言表作用」という概念が重要な役割をもつ以上、その限りでこの基盤となる「言表」の不在についてこうした指摘をすることはそれほど間違っていないと思われます）。ここで私は、超越論的領域としての言表を提起したいわけではありません。つまり、私がこのように言うのは、超越論的条件としての言表の考察が欠如しているからではありません。ドゥルーズは、『フーコー』のなかで明確に〈言表可能なもの〉を実在的経験に対する超越論的条件の一つとして定立しています。しかしながら、言表をカント主義哲学における条件の一つの特性である自発性^{アナロジー}として考えるのは、〈比例性の類比〉を端初とした思考のうちにあることに間違いありません。言表は、むしろ人間身体の触発を含んだ外部の実在性を、つまり外の諸力を内含した多様体そのものであり、この限りで上述したような言語の他の諸要素を自らの派生物とするのです。超越論的に発生するものと基本様態の派生物とは、まったく異なるものであることに注意しなければなりません。あえて言うなら、前者がむしろライブニツツ的で、後者が実はカント的であるというのかなり皮肉なことです。例えば、『差異と反復』の第五章において、感覚されうるものの〈非対称的総合〉という感性論の言わば究極的論究が為された以上、そこから超越論的経験論の真に非-言語的思考について考察することも可能だったのではないのでしょうか。それにもかかわらず、何故その次の著作において出来事と意味についての言語的な超越論的思考に囚われていったのか。非-言語的思考は、例えば、カントにおける判断力論が可能となるまったくの非-言語論的な言表的基底といった問題を明らかにするものでもあります。そして、それは、後年のドゥルーズ＝ガタリにおける〈言表作用〉の構成要素をなす〈言表〉という同じ存在様態を作動させるものでもあります。

表面の超越論から平面の並行論へ

以上のように、『意味の論理学』においては、深さの〈上昇〉と高さの〈下降〉が平面の一義性を実質的に構成する思考上の二つの理念的運動であった。この上昇過程が超越論的領域を発生させるまでに浮上するのが動的発生の意味であり、これに対してこの領域による下降作用は浮上が超出していく表面を絶えず形成し

続けるという意味において静的発生である。ところで、それらは、まさに〈過剰-存在〉の真の機能素だと言えます。というのも、深さの浅さへの浮上は実際には平面に対していつのまにか落下が必要なほどまでに上昇してしまい、また低いところへの下降は今度は表面を突き抜けてどこまでも落下し続けることになるからです——〈過剰-上昇〉と〈過剰-下降〉。永遠回帰としての平面は、つねに深さと高さに対してこうした齟齬と非収束という特性を有しているのです。平面なしには、この〈過剰-存在〉は不可知のままでしょう。現在でも参照されるべき『意味の論理学』の書評のなかでフーコーは、次のように述べています。「しかし、『意味の論理学』は、とりわけ形而上学概論のもっとも大胆なもの、もっとも傲慢なものとして読まれなければならない。——ただしそれは、またしても形而上学を存在の忘却として告発したりはせず、今回こそ形而上学に〈過剰-存在〉を語らせるのだという単純な条件においてである。自然学、それは、物体、混合、反作用、外部と内部の機構をめぐる観念論的構造についての言説である。形而上学、それは、非物的なもの、幻影、偶像、模像の物質性についての言説である」[強調、引用者]⁽¹⁸⁾。プレイエが述べているように、初期ストア派の人々のカテゴリー論は自然学の問題であり、それゆえ非物的なものも自然のうちに内在するものです。したがって、たとえ表面が形而上学的と呼ばれるにしても、それは自然に内在する観念の運動のことであり、その限りにおいてその〈対象性〉(objectité)を有することになります。形而上学は、そこでは物体の表面においてのみ成立する非物的な〈出来事-意味〉の一つのトポスなのです。しかしながら、それ以上に形而上学それ自体がすでに錯覚の所産であることも事実でしょう。何故なら、錯覚あるいは幻影は、つねに真理とともにあるからです。正確に言うと、あらゆる意味での形而上学が成立するのは、何よりもその対象性ゆえに、われわれが真理と錯覚とを完全に混合して理解することによるとさえ言えます。形而上学とは物の状態の表面で成立する知であると言ったところで、それはこうした意義を有する限りでのことでしかないでしょう。『意味の論理学』では、精神分析だけでなく、形而上学もまったく無傷のまま、ただし発生論のもとで存続し続けることになります。『ベルクソニズム』のなかでドゥルーズは解のレベルでの問題提起をもっぱら〈偽の問題〉として扱いましたが、より本質的に言えば、それはむしろ〈悪い問題〉ということなのです。それは、冒頭で述べたように、結局は補完、再認、根拠づけ、注解、目的、追認、等々に還元されるような思考の仕方だからです。〈偽の問題〉とは、実際には問いなき問題であり、問いの力能のない形式と解答への意志からなるものことです。

自然の本性から必然的に生じるものは、自然法則という一般的

真理だけでなく、人間身体、芸術作品、文学言語、等々の存在過程も同じ必然性のもとで、しかし非-科学的な知を形成しつつ特異性の法則のもとで産出されるでしょう。ところで、それぞれの実在的な経験のもとでわれわれは、つねに真理の観念を希求しているでしょうか。隠されていると考えられた真理ほど、実は愚鈍なものはないでしょう。というのも、真理が存在するとすれば、それは、むしろわれわれに内在し、またつねに現前しているはずだからです。スピノザは、真の観念はいかなる意味でも他の観念を媒介することなく、われわれに現前し内在すると言います⁽¹⁹⁾。しかし、この問題は、ここで扱うにはあまりに大き過ぎます。それでも、真理の内在性において哲学はいかなる過程を成立させるのか、という問いをここで提起することはできるでしょう。これは、端的に言うと、アナロジー（優越性、類似性、矛盾、多義性、等々）の思考が徐々に消尽する物質的過程であり、また存在と価値の位階序列における上層部の下向過程と、それに必然的にもなう下層部の上向過程との諸運動による一義性の平面の実現につながっています。表面のプラグマティックは、こうしたあらゆる位階序列の解体と平面化の創建につながっているのです。形而上学は、その対象性の〈存在-価値〉が下落したなかで、はじめてその価値の真価、つまり表面の構成要素としての真価が明確になるのだと言えます。いずれにしても、形而上学が表面の価値以外の何もかも有していないことが理解されるはずで、こうした意味において形而上学それ自体は、どこまでも行っても人間存在や人間精神の痛みや疲労の表出でしかない以上、これらの〈認識根拠〉にしかならないでしょう。というのも、それは、ニヒリズムの最大の派生物であり、人間精神における希望と恐怖の代替物にほかならないからです。それは、例えば、われわれの歯の痛み（あるいはその意識）が実際に歯の存在の認識根拠にしかならないのとまったく同様です。では、歯は、日々のなかで何を肯定する存在なのでしょう。痛みなしに、すなわち否定性なしに、つまりこれらに先立ってその肯定的な存在根拠の観念を有すること、これが平面上への落下の意義です。それゆえ、歯の存在根拠とは、まさに落下の痕跡をともなった〈噛み砕くこと〉という肯定的な不定詞として、われわれの無意識を形成する多様な観念の一つとなっているもののことです。こうした観念を対象性として現働的に思考すること、これこそが一義性の平面の哲学的思考であり、また自然のうちに内在する観念の機能なのです。精神分析は、こうした意味での人間精神の認識根拠における表面の科学あるいは芸術以上でも以下でもないものでしょう。では、人間精神そのものの〈存在根拠〉とはいったい何であるのか。問いの力能を有した〈一つの問い〉は、つねにこうした存在根拠の諸問題のために存するかのようなものである⁽²⁰⁾。

ここまで述べてきたいくつかの問題提起によって、どのような変形や触発が意味の論理において考えられるであろうか。この著作におけるもっとも〈悪い問題〉、それは、おそらく言葉の成立（第三次配置）を目的論化することにあるように思われます。『意味の論理学』では、媒介の思考や共可能性のもとでの諸地層（秩序／組織／配置）の間の移行の言説（動的発生／静的発生）が相互に基礎づけ合いつつもっぱら展開されています。自然が放った矢を捉えて、丁寧に磨くことは重要なことであるが、しかしそれはおよそ解を与えるための手段にすぎないでしょう。この矢の最大の行使は、問題投射することにあります。こうした論点も含めてまさに成立する思考の仕方、それが〈批判の問題〉なのです。それは、現行の意味にも無意味にも関わることなく、むしろ非物体的なものの変形やあらゆる価値の価値転換についての問いの力能を問題構成することにあります。では、これと同時に哲学における身体の問題、つまり臨床の問題はどのように考えられるべきでしょうか。それは、有機的身体が有する視点に先行するような非有機的な変容的遠近法がいかにして身体の変様のうちに存立しているのかという、非身体的変形や価値転換の発生的要素となりうる限りでの身体の強度的変様の問題なのです——すなわち、超越論なき並行論、〈深さ／高さ〉なき自然哲学、表面なき平面の内在性の哲学、ニヒリズムなき〈変形／転換〉についての倫理学。ドゥルーズは、次のように批判と臨床について規定しています。批判の問題——「無-意味が姿形を変え、カバン-語が本性を変え、言葉全体が次元を変える異なる水準の決定の問題」。臨床の問題——「或る有機体から別の有機体への地滑りの問題、前進的で創造的な脱有機体の形成の問題」[強調、引用者]⁽²¹⁾。これらは、必然的に一つの並行論を、つまりここで言われる決定と形成の問題を含んだ〈批判／臨床〉の平面論を形成することになるのではないのでしょうか。スピノザにおいては、まったく不確定のまま残された〈精神／身体〉の並行論における言葉の問題があります。これに対して『意味の論理学』においては、〈批判／臨床〉の平面論におけるとりわけ言語の同じ問題に対する具体的で異質な創造的な問いの諸要素が内含されているように思われます⁽²²⁾。こうした並行論は、まさに反転の一義性として存立しています——中立性から表現へ、そして実現から反転へ。ここでは〈到来するもの〉と〈言われるもの〉との同一性は、身体における強度の差異とその言表の様態機能とに発散していくものである。こうした一義性の平面論においては、語や文や命題を予め前提しつつ、それにもかかわらずそれらを超越論的に条件づけるという〈意味-無意味〉のア・プリオリ性に奉仕するよりも、むしろ言語のあらゆる様態や作用をもっぱら派生物とするような〈言表-言表作用〉に関する問題を構成することの方がより本質的であ

る。

最後に

さて、初期ストア派の、カントの、ガタリのそれぞれ四つのカテゴリーは、いかなる思考をわれわれに提起しているのでしょうか。これらは、すべて〈非物体的なもの〉の特性、非言語性、変形と転換の変革論につながるものです。かつてドゥルーズは、今や哲学は反時代的でなければ、歴史的でも科学的でも永遠でもありえないと言い、もはやこれまでのような仕方では哲学の書物を書くことはできないであろうと述べていました。皆さん、私は、ぜひこうした問題について真剣にかつ継続的に考えていただきたい

と思っています。哲学とは、ニーチェが言うように、そもそも反時代的——つまり、非現働的——でなければ存立しえない唯一の思考なのです。哲学あるいはその思考の発生的要素は、或る反時代的で非現働的なものにあるということです。この『意味の論理学』を通して、二〇世紀の現代思想的表層面だけでなく、より本質的で内在的な哲学の思考の様態を捉え、またこの著作を基にして、人間精神をその限界にまでもたらしような転換の仕方を作動させていただきたいと思っています。

本日の私の話は、以上になります。ご静聴、ありがとうございました。

注

1. 本稿は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（一九六九年）出版五〇周年記念の特別企画——「『意味の論理学』を本質変形する」（二〇一九年二月七日、於 慶応義塾大学・三田キャンパス、主催：秋田大学教育文化学部小倉研究室、DG-Lab（ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ）——での講演会を基に、その際の配布資料とともに再構成するだけでなく、新たな論考として成立させたものである。講演会では、フェリックス・ガタリの地図作成法におけるとりわけ〈非物体的なもの〉の機能素（U）についても話題にしたが、残念ながら、本稿では省略せざるをえなかった。
2. 「ひとはかくも長きにわたって哲学の書物を書いてきたが、そのように書くことがほぼ不可能になる時代が間近に迫っている。「ああ、古いスタイルよ……」（Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p.4 [以下、DR と略記]（『差異と反復』財津理訳、河出文庫、二〇〇七年、上・一八頁））。
3. これは、この企画の当日に配布された資料、小倉拓也「導入——『意味の論理学』の地図作成」からの引用である。まさに「（……）表面には意味の論理学のすべてがある」、またそれは、「純粋な出来事の理論であり、線状のあるいは表層の凝縮の理論」である（G. Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, pp.114, 209 [以下、LS と略記]（『意味の論理学』小泉義之訳、河出文庫、二〇〇七年、上・一七〇頁、下・一一頁））。最近、次の著作が出版された——鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、永久革命』（岩波書店、二〇二〇年）。本書は、ドゥルーズの哲学の基本特性の一つである分類の哲学としての意義や厳密性に徹底的に配慮して書かれた、『意味の論理学』についての特権的な研究書であると言える。これは、『意味の論理学』における諸概念とこれについてこれまで書かれた多くの言説とに対する言わば〈トポス論〉（カント的な意味で）の方法が発揮された成果であると言えるだろう。
4. セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』、第九巻、二一（『初期ストア派断片集 2』水落健治・山口義久訳、京都大学学術出版局、二〇〇二年、〔三四一〕、四五二頁）。「彼ら〔初期ストア派の人々〕にとってこの考え方の重要性は、つねに言語において動詞によって結果＝効果を〈表現する〉ということに向けられた彼らの関心を通して示される」（Emile Bréhier, *La théorie des incorporels dans l'ancien Stoïcisme*, Vrin, 1908, p.12 [以下、TI と略記]（エミール・ブレイエ『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、二〇〇六年、二六頁））。
5. 諸著作を時系列的あるいは発展史的に、つまり有機的に読むことも拒否すれば、例えば、次のような平面は、まさにここで考察しているストア派由来の出来事の哲学に現前し、またこの哲学が取り入れるべき物体と非物体との並行論であろう——「内在平面は、〈思考〉と〈自然〉、あるいは〈精神〉と〈自然〉という二つの面をもっている。それゆえ、一方の回帰が瞬間的に他方を投げ返す限り、一方が他方のうちに取り込まれ、一方が他方のうちに折り畳まれるような多くの無限運動がつねに存在するのであり、その結果、内在平面は絶えず織り上げられる巨大な罫のようである」[強調、引用者]（G. Deleuze / F. Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit, 1991, p.41（『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、二〇

一二年、七〇-七一頁))。この言説は、後で述べるような、〈到来するもの〉と〈言われるもの〉との間の存在の一義性をより普遍化した平面上での反復を示している。

6. Cf. G. Deleuze, *LS*, p114 (上・一六九-一七〇頁)。
7. E. Bréhier, *TI*, p.15 (三一頁)。ところが、〈表現可能なもの〉についての誤った解釈が流布している。それは、物の属性、つまりその存在者が有する特質としての〈肯定されるもの〉が、つねに〈意味されるもの〉と同一化されるという解釈である。この〈表現可能なもの〉あるいは〈肯定されるもの〉を、例えば、スピノザにおける「積極的なもの」と考えるならば、この解釈の違和感はより明確に理解されることであろう(スピノザ『エチカ』、第四部、定理一、参照)。ブレイエは、この解釈が流布した理由を次のように述べています——「それは、アルニムが初期ストア派の人々に関する編纂書のなかの論理学に関する諸断片に「〈意味されるもの〉あるいは〈表現可能なもの〉について」という表題をつけることでこの解釈を正しいものとしたからである」(E. Bréhier, *TI*, p.15 (三一頁))。
8. ドゥルーズ=ガタリは、デンマークの言語学者イェルムスレウを「スピノザ主義的地質学者」と称している(G. Deleuze / F. Guattari, *Mille Plateau*, Minuit, 1980, pp.57-58 [以下、*MP* と略記] (『千のプラトー』宇野邦一・他訳、河出文庫、二〇一〇年、上・一〇〇頁))。ということは、あえてオランダの哲学者スピノザを〈イェルムスレウ的言語学者〉と言うこともできるであろう。そこで、実際にイェルムスレウにおける基本概念である〈表現/内容〉を適用してスピノザの『エチカ』を読解してもらいたい。ドゥルーズの表現の三つ組を前提にしたままで、この基本概念を適用していくと、つねにどこかで行き詰まり、また矛盾に陥り、それ以上まったく進まないことを何度も経験することになるでしょう。しかし、そのときはじめて、〈表現/内容〉で思考することの意義がどこにあるのかを真に思い知ることになるでしょう。つまり、問いの力能を有した諸問題としてはじめて〈表現/内容〉について思考できるようになると思われます。それは、まさに非カテゴリー的なアナロジーなき思考である。
9. イマヌエル・カント『純粋理性批判』、A573=B601、A576=B604 参照。
10. こうした超越論哲学においてもっとも本質的な論点に関しては、例えば、福谷茂「存在論としての「ア・プリオリな総合判断」」(『カント哲学試論』所収、知泉書館、二〇〇九年、一三一-一三七頁)においては、カントのライブニッツ批判が簡潔に論述されており、ぜひ参照していただきたい。また同様に、石川求『カントの無限判断の世界』(法政大学出版局、二〇一八年)においては、無限判断の特性を通して「汎通的否定」というきわめて重要な概念が提起されています——「否定が具体化するためには媒介が、あるいは共通の類が必要である。しかし、無限判断の主語と述語はそれをもたない。もたないがゆえに、無限判断の不定性は、数え切れない否定の集積すなわち汎通的否定となる」[強調、引用者] (六二頁)。
11. 『純粋理性批判』の「弁証論」のなかで、神は、排他的離接(選言)の三段論法(Sはpあるいはqである——Sはqではない——ゆえに、Sはpである)の原理として、つまり〈超論論的基体=S〉として定立されています。これによってカントにおいては、「各個の物の完全な〔汎通的〕規定は、この実在性の全体〔理念〕を制限することに基づく。すなわち、この物に或る実在性が付与されるが、他の実在性は、排除されるのである」(『純粋理性批判』、A575-577=B603-605)、と述べられることとなります。これに対抗する仕方、『意味の論理学』の「付録」として収録された「クロソフスキー、あるいは〈身体-言葉〉」においては、選言の三段論法の「悪魔的原理」としての強度的使用法が提起されています。ドゥルーズは、要するに、超越論哲学を脱出する思考法が言語と身体との並行論にあることを理解していたと言えるでしょう——「クロソフスキーの作品は、身体と言語活動との驚くべき並行論のうえに、あるいはそれら相互の反映のうえに構成されている」(G. Deleuze, *LS*, p.325 (下・一八五頁))。『意味の論理学』には五編の論文が「付録」として収録されています。これらは実はこの著作のほぼ四分の一以上の分量を有しており、この「付録」の意義は改めて考えられるべき事柄であろう。私がここで言えるのは、この「付録」は、まさに〈意味の論理〉に対する〈外の思考〉であり、また別の異なる非整数的で非対称的な強度空間を多様な方向性のもとで与える大気のような論文群であるということです。
12. 自己原因と作用原因に関してスピノザとはまったく異なる原因の一義性としての永遠回帰に関する論究は、拙著『存在と差異——ドゥルーズの超越論的経験論』(知泉書館、二〇〇三年、二三二-二三八、二四九頁)を参照されたい。

13. 「不一致対象物」については、カント『プロレゴメナ』、第一三節、参照。さらに、この問題の逆説性を強度の総合に接続する論点、またその非対称的総合と理念との関係については、G.Deleuze, *DR*, pp.298-299, 314-316 (一六九-一七〇、二〇二-二〇六頁) を参照せよ。
14. 「この『意味の論理学』でうまくいっていないことは何であっただろう。たしかにそれは、まだ精神分析に対して無邪気で、罪深い愛嬌を振りまいていた。それを弁解するなら、こういうことである。つまり、それでも私は、実はおずおずとではあるが、表面的な存在者性としての出来事に関わる表面の芸術としての精神分析を提示しながら、これを無害なものにしようとしたのだ(……)。しかし、いずれにしても、精神分析の概念は無償のまま尊重されているし、メラニー・クラインもフロイトもそうである」[強調、引用者] (G.Deleuze, *Deux régimes de fous : texts et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003, p.60 (『意味の論理学』イタリア語版への覚書) 宇野邦一訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』所収、宇野邦一監修、河出書房新社、二〇〇四年、八七-八八頁))。私が『意味の論理学』を〈有機的超越論〉とここで称するのは、ドゥルーズ自身が述べているような、この著作での「うまくいっていないこと」のとりわけ精神分析的部分についてです(このことはまた、この考察の冒頭で述べた注解する者の意志がもつ大きな弱点につながっているように思われます)。これに反して、『意味の論理学』には、例えば、非-有機的で脱-超越論的な言わば〈無機的並行論〉の思考の萌芽をむしろうまくいっている哲学的部分として積極的に見出し問題構成していくという課題が残されていると思われる。
15. E. Bréhier, *TI*, pp.21-22. (四〇-四一頁)
16. 〈副-言〉と不可分な〈非-存在〉の概念については、とりわけ拙論「現前と外部性——非-論理の革命的思考について」(『すべてはつねに別のものである——〈身体-戦争機械〉論』所収、河出書房新社、二〇一九年、一三-九八頁) を参照されたい。
17. Cf. G. Deleuze, *LS*, pp.210-211 (下・一三-一四頁)。
18. Michel Foucault, *Dits et Ecrits, Tome II, 1970-1975*, Gallimard, 1994, p.79 (「劇場としての哲学」蓮實重彦訳、『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ』所収、筑摩書房、一九九九年、四〇一-四〇二頁)。
19. スピノザ『エチカ』、第二部、定理四三、備考、参照。
20. こうした〈認識根拠〉(ratio cognoscendi) と〈存在根拠〉(ratio essendi) の違いについては、G. Deleuze, *Nietzsche et philosophie*, PUF, 1962, pp.198-199 (『ニーチェと哲学』江川隆男訳、河出文庫、二〇〇八年、三三四-三三七頁) を参照されたい。
21. G. Deleuze, *LS*, p.102 (上・一五四頁)。批判は第一に有限な肯定的作用であるが、ドゥルーズはこうした意味での批判作用をまさに総合的に実現した哲学者の一人である。ベルクソンやスピノザ、ライブニッツやニーチェについてのドゥルーズの論考は、すべてこうした批判によってはじめて思考され見出されるような肯定的な強度的部分からなる。ということは、こうしたドゥルーズの哲学について論究し、それを研究する場合、ひとは、やはり同様の批判作用を対象として、つまり諸観念の多様体を真に批判の問題として作動させる必要があるのではないのでしょうか。
22. こうした問題については、すでに以下の著作のなかで考察しているので、ぜひ参照していただきたい——拙著『スピノザ『エチカ』講義』(法政大学出版局、二〇一九年、三五三-三六九頁)、拙稿「〈身体-戦争機械〉論について——実践から戦略へ」(『すべてはつねに別のものである』所収、二四〇-二五九頁)。またドゥルーズは、こうした並行論をガダリとともに『千のプラトー』において、〈身体の機械状作動配列〉と〈言表作用の集散的作動配列〉からなる平面の脱領土性並行論として考察しています (Cf. G. Deleuze / F. Guattari, *MP*, p.112 (上・一八八頁))。